安部公房『第四間氷期』

――水のなかの革命――

鳥羽耕史

一　水棲人間とミチューリン生物学

『第四間氷期』は、一九五八年七月から一九五九年三月にかけて、雑誌「世界」に連載された「空想科学小説」である。[1] コンピュータによるシミュレーション、遺伝子工学、地球の温暖化等、この小説は、今日の科学の用語に置き換えられるような要素に満ちている。しかし、まさにそれゆえに、今日この小説を読むのは大変困難な作業となる。なぜなら、この小説のディテイルをそのままこれらの用語に置き換えて考えることは、我々を致命的な誤読へと誘うからである。安部公房自身、この小説についてくりかえし語り、その誤読を実践していった張本人でもあった。例えば一九八〇年代になって安部は、ある講演の中でこの作品を要約し、「遺伝子組替えの技術」によって水棲人間をつくったと述べる。[2] しかし、ワトソンとクリックによるDNAの二重らせん構造仮説発表のわずか五年後に書かれたこの小説において、遺伝子工学は登場しない。この小説の水棲人間を誕生させた技術は、「遺伝子組替えの技術」ではないのである。我々は、この小説を読むとき、まず当時の科学の水準にまで遡行する必要がある。

この小説が書かれた時点で、今日の遺伝子工学に相当する生物改造の構想を持っていた生物学者の筆頭は、ソヴィエトのトロフィム・デニソビチ・ルイセンコであった。彼は一九三六年十二月の演説で、正統派遺伝学者ヴァヴィロフの問いに答えてこう述べている。

> ヴァヴィロフ――きみたちは遺伝性をつくりかえるというのか？
>
> ルイセンコ――さよう、遺伝性を！[3]

このように華々しく宣言するルイセンコは、ソヴィエトの品種改良家ミチューリンの名を冠した新しい生物学の提唱者だった。この小説の書かれた一九五〇年代とは、ミチューリン生物学がソヴィエトを席捲した時代であった。一九三五年二月の演説で、ス

ターリンをして「ブラボー、同志ルイセンコ、ブラボー！」と叫ばしめたルイセンコは、それ以後、スターリンに続く支持者フルシチョフの解任とともに批判が再開される一九六四年十月までおよそ三十年間、ソヴィエト科学アカデミーに君臨した。ミチューリン生物学は政府に支持され、その批判は完全に封じられた。ルイセンコの最も強力な敵対者だったヴァヴィロフは、一九四〇年八月に逮捕され、一九四三年一月に獄死した。[4] ルイセンコの影響は東欧諸国をはじめとする海外にも及び、世界にはメンデル＝モルガンによる遺伝学と、ルイセンコによる遺伝学という「二つの遺伝学」[5]が存在することになったのだ。では、ミチューリン生物学とはどのようなものだったのだろうか。

一つの種が他の種から発生する初因は、種内に型態の不同が現われる初因とおなじように、動植物の生活条件の変化であり物質代謝の型の変化である。

新しい種の発生とは、それらの種的細別にふれるような、生物の発育過程における物質代謝の型の変化と関連している。[6]

ルイセンコは「遺伝性をつくりかえる」にあたって、まず遺伝子の存在を否定することからはじめた。遺伝子によって先天的に形質が定められるというのはブルジョア偽科学の論法であり、生物は環境との相互作用によって自らの特性を変えていくのだ、というのが彼の理論の核心であった。「一つの種が他の種から発生する」ために必要なのは遺伝子の変異ではなく、「物質代謝の型の変化」だというわけである。これは、単一の植物を食べていた状態から多様な植物食へと移行し、さらに肉食をはじめたことで、猿が人間になる条件が整ったとするエンゲルスの「猿が人間化するにあたっての労働の役割」に、多少の生物学的アレンジを加えたものであった。ルイセンコの提唱したミチューリン生物学とは、つまり唯物論的弁証法をそのまま生物学に応用したものだったのである。彼が世界的に有名になったのは、小麦の春化処理（ヤロビザーツィヤ）と呼ばれるものによってであった。これは播種前の秋播き性小麦を低温で処理することにより春播き性に変え、さらに収穫も増加させることができるというもので、今日の目から見るといたって根拠の薄弱なものである。スターリンをはじめとするソヴィエト共産党の幹部がこぞってこの理論を支持したのも、それが党のイデオロギーと完璧に合致するためであり、実際の成果はかなりの部分、捏造されたものだったのである。

この理論の日本への紹介と反響については、中村禎里『日本のルイセンコ論争』[7]にくわしいが、一九四〇年代後半から五〇年代にかけて、賛否を問わず非常な注目を集めていた。ソヴィエト共産党公認のこの理論に対し、日本共産党は「中央委員会として正式に肯定したことはない」けれども、「当時の徳田球一書記長の書いたものには、ルイセンコ学説を推奨した文章が三点」[8]あるという状態だった。一九五〇年に入党したばかりの安部公房は、徳田球一を中心とする所感派に属していたため、[9] 徳田を通じてルイセンコ学説を受け入れた可能性がある。

さて、それでは改めて、『第四間氷期』において「進化を、偶

発的なものから、意識的なものに変える力」(35)として登場する哺乳類の水棲化の技術を検証してみよう。それは、系統発生をくりかえす個体発生の流れから、その一部だけを止めてしまうというものである。まず、動物の発生の段階で、分裂を促進するプラスの刺戟をもつホルモンと、分裂をおさえるマイナスの刺戟をもつホルモンをうまく組合わせ、鰓だけを残して他の部分を分化させた一世代目をつくる。それには生殖能力がないが、二代目を同じようにつくると、そこで繁殖力が生じる。つまり物質代謝の変化によって獲得された形質が遺伝を開始する、ということになる。この水棲化の方法は、ネズミから人間に至るまで同じである。遺伝子の組替えではないから、この計画に必要なのは精子や卵ではない。鰓が分化する前の三週間以内の胎児であり、そのため胎児ブローカーが登場するわけである。

要するに、水棲化という技術の基礎になるのは、遺伝子ではない。ここで動物の形質を変えるのは、発生の段階における環境との相互作用である。そうして得られた性質は、遺伝性を変化させ、そのまま子孫に受け継がれていく。これは、まさしくミチューリン生物学による発想なのである。

二　サイバネティックスとパヴロフ的身体

マジック・ハンドが動きだした。同時に数本の針が、体の各部にささり、壁にはめこめられた無数のランプの列が、縦横に組合せ(機械の言葉)を変えながら点滅していくと、それに応じて箱の中の屍体が、まるで生きているように自由な運動をしはじめるのだ。(13)

この小説のもう一つの軸になる技術は、電子計算機である。小説の語り手「私」たる勝見博士は、日本における予言機械の開発者である。彼はある男の未来を予言しようとして調査をはじめるが、その途中で男は何者かに殺されてしまう。勝見博士ら中央計算技術研究所のスタッフは、殺人事件の犯人をつきとめるため、中央保険病院の山本博士の手を借り、被害者の屍体を電子計算機に接続して分析する。このグロテスクな屍体のダンスは、その準備段階におけるものである。このシーンは、ソヴィエトにおける次のような科学的知見に基づいている。

神経外科の最近の成果によって、脳髄の手術のときに、電流によって皮質の各領域を刺戟し、この場合に患者にどのような運動あるいは感覚が起るかを観察することができるようになった。(10)

小説ではこれが屍体に対して行われているので、まるでカエルの足に電流を流す実験のような印象を与える。この準備段階を経て、「運動の函数」(13)や「人格方程式」(14)が決定されていくのである。これはパヴロフ的な発想である。

パヴロフ生理学の根本にあるのは、言語や人格にまで生理学的な基礎を見出そうとする徹底した唯物指向である。そしてそれが、ソヴィエト公式の人間観でもあるのだ。例えばストロガーノフと

シュースチンは、『パヴロフ学説』のなかで、「環境世界と生体との相互関係をますます細かく精密なものとして確立して行く」ものとして中枢神経系を規定するパヴロフを、ルイセンコがその生物学に名前を冠した「偉大な自然改造者ミチューリン」と並べて讃えている。[11]

また、ここで「機械の言葉」によって神経が操られるという事態は、サイバネティックスによる発想でもある。[12] サイバネティックスとは、最初の電子計算機ＥＮＩＡＣが誕生した二年後の一九四八年、アメリカのノーバート・ウィーナーによって提唱された新しい複合領域の科学であった。第二次大戦中の高射砲の弾道分析からはじまったサイバネティックスの発想の根本は、制御や通信においてフィードバックを用いることである。それが神経系の再現にまで応用されるようになり、さらにコンピュータを脳のメタファーで捉える発想を生むことになる。

一つの語はネウロンの中に保存された何か不思議な物質ではなくて、数百万のネウロン間の機能的関係の一つの相である。われわれの思考も、巨大な電子計算機と、その機能の装置の原則は全く同じである。二つのばあいともに電流が規定の通信を送ると、衝撃の閉じた回路の流れが直接記憶の根底の役をする。グレイ・ウォールタ（Grey Walter）は補助回線をもった電子頭脳で、初歩の条件反射を作った。[13]

この条件反射という一点において、アメリカの科学とソヴィエトの科学は接点を持つ。「唯物論者でありパヴロフの弟子である私」[14]として自らを規定する安部公房は、パヴロフにならって言語までも条件反射の一種と見なす立場をとっていた。「従来のリアリズム概念は、すべて、パブロフによって言語（精神活動）の物質的裏づけがなされる以前の、現実観によるものだった」[15]という安部は、またパヴロフの条件反射二系学説に触れて次のように述べる。

二系学説というのは、たとえば犬に食餌を与えれば唾液が流れ出るというような、どの犬でも、時と所をえらばず、同様に示す生来的な無条件反射を基礎にして、それに電鈴の音（条件刺戟）などを結合させてつくった条件反射（第一次）をさらに基礎にし、第二次の条件反射の形成を思いついた、いわば生理学的上部構造ともいうべき思想なのである。これは意識の生理学的基礎づけとして、ダーウィンの進化論にも比すべき思想革命であった。[16]

安部は晩年に至るまで「パヴロフの弟子」であることをやめなかった。安部は、遺稿となった「もぐら日記」[17]のなかでも、動物行動学のローレンツ、言語学のチョムスキーとともに、しばしばパヴロフの名を引きながら、自らの唯物言語観について語っている。それは脳のなかに言語の物質的対応物があるという思想である。

一方、ソヴィエトにおけるサイバネティックスはといえば、ブルジョア的エセ科学であり反動的な学問だと宣告され、一九五五

年まで研究・学習・討議ともに禁止状態であった。一九五〇年代に刊行された『ソビエト大百科事典』第二版には、サイバネティックスという言葉さえ載っていないという。[18] 禁止の理由は定かではない。アメリカ的なものを忌避する精神の産物かもしれないし、党が先に科学研究の方針を決めてから研究をはじめるという体制にそぐわなかったのかもしれない。これに対して『第四間氷期』では、コンピュータのプログラミングを次のように定義している。

プログラミングとは、要するに、質的な現実を、量的な現実に還元してやる操作のことである。(23)

ここでコンピュータは、質ではなく量を扱うものとされている。質から量へということで連想されるのは、いうまでもなくエンゲルスの『自然の弁証法』である。エンゲルスがヘーゲルの『論理学』から抽出してきた弁証法の三つの法則は、「量から質への転化、またその逆の転化の法則」「対立物の相互浸透の法則」「否定の否定の法則」であった。しかし、ここで問題になるのは、量的な現実を質的な現実に転化する過程、つまり予言機械の機能に即して言えば、予言結果の社会への適用が行われないことである。この小説においては、それは「友邦アメリカ」(4)の圧力により、政治的に袋小路に追いこまれているのである。研究解禁後、『第四間氷期』の単行本と同じ一九五九年にソヴィエトで出版されたサイバネティックス入門書では、奇しくも小説の「モスクワ2号」(4)と同名の計算機が登場し、[19] どのように社会の役に立つのかが具体的に説明されている。

質的な現実を量的な現実へ、そしてまたその逆へ、という過程は、電子計算機においてはまさにフィードバックの過程といえる。つまり、社会のデータを計算機に入力し、計算機に予測をさせ、その結果を社会に適用し、また社会のデータを入力する、という一連の過程が必要になるわけである。『第四間氷期』の予言機械にも、フィードバックに近い考え方が使われてはいる。予言内容の政治性チェックを行うプログラム委員会において、予言結果の発表によって予言を知ってしまった人間の行動をどう予言するのかという質問を受け、統計局の役人である友安は次のように答える。

「その場合には、最初の予言を知ったうえで行動したという条件で、もう一度予言をくりかえすわけですな。つまり、第二次の予言ですな……これがまた発表された場合は、第三次予言……というふうにやっていきまして、まあ無限大までもってゆく……これがいわゆる最大値予言になるわけで、現実はこれと第一次予言との中間の値をとる、というふうに考えればいいわけです。」(4)

一見合理的に見えるこの疑似フィードバックには、大きなおとし穴がある。つまり、すべてが計算機のなかで行われているだけで、現実に起ったことからのフィードバックがなされているわけではないのだ。予測の誤差を実測によって修正する、という

フィードバックの目的がここでは果たされない。結末近くで勝見博士が指摘する通り、誤差があった場合には、それがどこまでも大きくなっていく危険があるのである。

つまり問題になるのは、本当の意味でのフィードバックの不在ということである。予言機械は電子計算機というアメリカの技術によるものであるが、その内容は実現すべき計画をはじめから確実なものとして想定するソヴィエトの精神なのである。

サイバネティックスによって屍体を分析する中央保険病院の電子計算機を司る山本博士と、ミチューリン生物学による水棲人化を司る山本氏とが義理の兄弟であるという設定は見逃せない。彼らはパヴロフとルイセンコに象徴されるような兄弟の関係であるが、同時にアメリカとソヴィエトという、全く血のつながりを持たない義理の関係でもあるのだ。

三　水のなかの革命

私もいいかげん、うんざりしてしまった。政治というやつは、逃げようとすればするほどからみついてくる、蜘蛛の糸みたいだ。(4)

「私」たる勝見博士は、日本における予言機械の開発者であった。ところが、ソヴィエトの予言機械が未来はかならず共産主義社会になると予言したことから、「友邦アメリカ」の圧力により、政治にかかわる一切の予言を禁じられてしまう。しかし、政治に関係のないものを予言しようとしても、結局何らかの形で政治に関わってしまうことを思い知らされるだけであった。一つの抜け道に見えた私的な個人の未来の予言も、極秘に進められていた水棲人間と海底植民地の開発という政治計画に期せずしてつながってしまうのだ。この小説は、その冒頭からアメリカとソヴィエトの力関係の中に置かれている。その中で、勝見博士の政治的立場は、和田や頼木といった研究所の所員たちによって次のように評価される。

「じゃあ、先生は、自分の未来を予言機にかけてみる勇気なんて、とてもおありにはならないわね。」(20)

「先生が執着しているのは、要するに機械だけで、予言内容には関心がないことを公然と認めたことになる。」(22)

ここで先生と呼ばれる勝見博士は、ソヴィエトの精神とアメリカの技術からなる予言機械に対して、その精神を無視し、技術のみを重視する。つまり、勝見博士はアメリカ的な人物として設定されているのだ。

同じ研究所の所員である頼木の立場は、もう少し複雑である。彼は、勝見博士によって「階下の連中」と呼ばれる調査室のメンバーの前で、勝見博士の弾劾演説をしているところを当の勝見博士に目撃される(5)。その一方で、彼は勝見博士によって「いずれ私の後をうけついでいく男」(10)だと思われているのである。つまり、頼木は、オルガナイザーであり、勝見博士の忠実な助手でもあるという二面性を持って描かれている。しかし、彼は

勝見博士の助手ではあっても、本質的にはその後継者などでは全くない。それは勝見博士からの一方的な思いこみである。後で頼木は研究所の裏の組織である海底開発協会の支部委員会の室長であり、また先の殺人事件の犯人でもあったことが判明する（32）。頼木は予言機械による勝見博士の第二次予言値の指示により、勝見博士が水棲人間の存在をかぎつけて騒ぎだすまえに、手がかりとなる人物を抹殺したのだ。この委員会は日本国政府と財界によって支援され、水棲人による海底植民地をつくろうとする、一見右寄りの組織である。しかしその一方、そこに集った人々の思惑には違いがあり、後述するように、友安は単なる政府の役人として、頼木は革命家として委員会に参加しているのだ。頼木はミチューリン生物学にもとづいて造られた水棲人間に未来を託す、ソヴィエト的人間として設定されているのである。

小説の結末で、アメリカ的人物であり研究所のトップに立つ勝見博士は殺されることになるのだが、その前に、頼木たちは勝見博士に「未来の予言」を知らせる。それは、海面が上昇し、日本国政府が海の中に移転する未来である。

やがて、海面につきだしたアンテナから放送がはじまった。

一　ついに第四間氷期は終りをつげ、新しい地質時代に入りましたが、軽挙妄動はつつしまなければなりません。

一　政府はその後の国際関係を有利に導くために、極秘のうちに、水棲人間を製造し、海底植民地の開発をすすめてまいりました。現在すでに、三十万以上の水中人を有する海底都市が、八つもあります。

一　彼らは幸福であり、従順であり、このたびの災害に対しては、あらゆる協力をちかってくれました。（36）

海の中に移転してからの政府の放送が、水中へではなく、「海面につきだしたアンテナ」からなされることに注意しよう。すでに水棲人間訓練所における山本氏の話において、電波は水中では使えないものとされていた。そのため、水棲人間たちはこの放送を聞くことがない。つまり、水中に移転したとはいえ、今後の方針を放送する日本国政府が持っているのは、地上に対する権力なのである。電波によるその力は、水中の水棲人間たちの世界には及ばないのだ。

この後、「幸福であり、従順で」あったはずの水棲人間たちは、ストライキを経て、政府に加わるようになり、ついには自分の政府をもつことになる。諸外国は彼らの政府を承認し、さらに自ら水棲人化に踏み切る。こういった事態の進行はゆるやかであり、また穏やかにも見えるが、やはり革命を意味しているのである。頼木は、友安との思想の違いを認めながら、海底植民地の開発について、「やむを得ないからではなく、それ自体が積極的に素晴らしい世界」（34）だから意味があると述べていた。未来の世界においては「私も死んでしまっているでしょうから」（36）水棲人が主導権を握ってもかまわないという友安に対し、頼木は水中の革命を支援する革命家としての役割に殉じている。彼は、予言機械がこの革命について語りはじめるとき、勝見博士に対し、こ

のように話していた。

「先生、未来の予言です……本物の未来の、青写真ですよ……さぞかし、ごらんになりたかったことでしょうね……」(35)

頼木のこのセリフの後、「それから、機械は、こんな話をした」(36)として、先程からの未来の革命の話がはじまるのである。ここで予言機械が「話」をしたとされていることに注意したい。それを「予言」と呼ぶのは、かつて「階下の連中」の前で「私の弾劾演説をやっていた」頼木なのだ。ここでの「階上／階下」は、文字通りの階級の問題を表している。勝見博士は研究所の所員たちを「階下の連中」と呼びつづける。しかし、二重組織になっていた研究所の裏の組織である委員会も、結局「下の木村さんたち」(34)には、組織の存在を知らせずにいるのである。この小説が、安部と日本共産党との亀裂のきっかけとなった東欧紀行[20]の後で書かれたという事実に注目しよう。ここでの委員会は、「階下の連中」に予言を知らせない、大衆の現実から遊離した指導部として描かれているのだ。その描かれ方は、「現実から遊離した政策」をたて、「本当の意味で大衆を信用する気持がない[21]」とされる日本共産党の指導部とパラレルなのである。その委員会のトップである頼木は、予言機械が予言した勝見博士の未来について、博士自身に語っている。

「後でテレビでお目にかける予定ですが、先生は、その未来に対して公然と反対の立場をとられたのみならず、しまいには、予言機械の予言能力にまで疑いをもち始めた。」

「知らないよ、そんな過去形をつかわれたって……」

「でも、予言機が予言してしまったんですから、仕方がない……」(32)

予言機械による未来が過去形で語られるのは、それが「太古のように遥か」(37)な感じを与えるからではない。頼木たちの委員会が予言機械の「話」を、完全に確実な予言として受け入れているからなのだ。これは「実現されるべきだ」が「実現された」という過去形に転倒する瞬間の問題なのである。この予言機械は、転倒した計画経済のパロディとして設計されている。自らプログラムを組んでいくことのできる予言機械には、予言の自己言及的な疑似フィードバック過程により、次第に現実から遊離していくというプログラムが内包されているのだ。

一九六一年一二月、安部公房は花田清輝、大西巨人らと共に日本共産党を除名される。一九五〇年の入党以来の共産主義者としての立場に、ここで名実ともに終止符が打たれたわけである。彼の共産主義への態度の変化は、この小説の異版関係にもはっきりと見てとることができる。

《＝政治・予言・8》

つまり、あらゆる予言を知りつくしたうえで現れる政治の無

限次予言、すなわち最大予言値が共産主義だというわけだ。
「なるほど、これじゃ、予言機械をフルに使っていれば、いやでも共産主義になっちまうわけだな。」
すっかり感心し、思わぬ成果に気をよくして、さらに先に進んだ。

初出のこの部分は、一九五九年七月に刊行された初版でも大きな変更はなかったが、除名以後の一九六四年五月の刊行となる早川書房版では、勝見博士による「なるほど」以下の予言に対する感想が、次のように変更されている。

どうも、尻尾をくわえた蛇のような、こじつけめいた感じがしないでもなかったが、しかし定義は価値判断とはちがうのだから、機械に文句を言ってみてもはじまらない。とにかく先に進むことにして、（以下略）

ここに、一九五〇年代から六〇年代にかけての、安部の共産主義への態度変更を読みとることができるだろう。「予言機械をフルに使って」いくということは、先に述べた疑似フィードバックではなく、本当のフィードバックをしながら社会を建設していくということになる。予言機械に運用面での制限がなければ、最終的に共産主義社会が築かれるとするのは、理想としての共産主義を認めた態度である。ところが「尻尾をくわえた蛇のような、こじつけめいた感じ」となれば、それは共産主義が先に進めないどうどうめぐりとして評価されているということになる。次の変更は更に痛烈である。

「その、モスクワ2号がですね、さっそく、予言したんだそうですが、未来はかならず、共産主義社会になるっていうんですがね。先生、いかがでしょう……？」（初出）

「モスクワ2号の予言、お聞きになりましたか？　なんでも三十二年以内に、最初の共産主義社会が実現し、八十四年頃に最後の資本主義社会が没落するだろうっていうんですが、先生、いかがでしょう……？」（早川書房版）

一九七〇年一一月発行の新潮文庫版では、さらに「八十四年」を「一九八四年」としてその意図を明瞭にしている。もちろんこれは単なる年号ではない。ジョージ・オーウェルの『一九八四年』である。ビッグ・ブラザーの支配する全体主義のディストピアを連想させる年号を挿入することにより、「共産主義社会」という言葉に暗い色合いを加えたのである。

これらの変更から逆にわかるのは、一九五九年の時点において、安部は「共産主義」自体を否定していたわけではないということだ。この時点では、むしろ理想としての共産主義には希望をつないでいた。問題にされていたのは共産主義ではなく、日本における革命のあり方であった。水棲人間たちが「まぎれもない日本人の顔」（34）をしており、彼らの歯ぎしりによる言語も「文法は

日本語と同じ」(34)であることは重要である。ミチューリン生物学によってつくりだされた彼らも、全く別種の動物になったわけではなく、やはり日本人であるということを意味しているからだ。『第四間氷期』というフィクションのなかの、さらに現実から遊離した予言という二重のフィクションのなかで、日本の革命を描くことこそが、この小説の核心であった。これは日本共産党への批評になっているのである。勝見博士の死は、「世界の孤児」[22]たる日本共産党による、現実から遊離したプログラムの象徴であった。日本の内部の国境を無視するのではなく、それを意識した上で克服していこうというのが、この時期の安部の主張であった。アメリカ的な思想を持った、しかし平凡な日本人である勝見博士を抹殺することで、頼木たちの委員会はバランスを失っていくだろう。これこそまさに、安部の目に映じた、当時の日本共産党の姿だったのだ。この小説において安部公房は、サイバネティックスというアメリカを、ミチューリン生物学というソヴィエトを、そして何よりもその狭間にあった日本を照らしだすことに成功したといえるだろう。ここで表象されているのは二つの巨大な政治力の拮抗する場であり、それは一九五〇年代の日本が置かれていた位置なのである。これはまさに「世界」という雑誌にふさわしい連載であった。「空想科学小説」の『第四間氷期』は、安部公房にとっての一九五〇年代を映しだす鏡なのである。

注(1) 目次・表題などに「空想科学小説」と銘打たれている。なお、本稿では、章立てが整った最初の決定版といえる講談社の初版(一九五九年七月)をテクストとし、必要に応じて初出や早川書房版、新潮文庫版を参照した。引用に付した数字は初版の章番号である。

(2) 「技術と人間」(毎日新聞社主催国際シンポジューム、一九八五年一〇月八日〜九日。同年『毎日新聞』一〇月二八日、一一月六日朝刊に収録)。

(3) ルイセンコ「遺伝学における二つの傾向について」(大竹博吉訳『ルイセンコ選集 農業生物学2』ナウカ株式会社出版部、一九五三年九月、一〇〇頁)。

(4) 以上のルイセンコに関するデータは、主としてメドヴェジェフ著、金光不二夫訳『ルイセンコ学説の興亡』(河出書房新社、一九七一年六月)に拠った。

(5) 遺伝学における米ソの対立を解説した徳田御稔の本のタイトル(理論社、一九五二年一一月)。

(6) ルイセンコ「生物学上における種のあたらしい概念」(前掲書、二九八頁)。

(7) みすず書房、一九九七年三月。

(8) 鶴尾功「ソ連共産党の巨悪と自然科学」(『前衛』一九九二年四月)。

(9) 針生一郎「極私的安部公房ノート」(『ユリイカ』一九七六年三月)などに証言がある。

(10) ベ・エム・チェプロフ著、牧山啓訳『ソヴェト心理学』(三一書房、一九五三年六月、四七頁)。

(11) 岩崎書店、一九五四年七月、九一頁。

(12) 時實利彦「筋運動支配の自動制御機序について」(北川敏男編『統サイバネティックス』みすず書房、一九五四年八月、一一三頁)などに全く同じ種類の発想が見られる。

(13) ポール・ショシャール著、吉倉範光訳『言語と思考』(白水社、一九五七年一一月、六四頁)。

(14) 「常識について」(『文庫』一九五三年一月)。

(15) 「新記録主義の提唱」(『思想』一九五八年七月)。
(16) 「文学における理論と実践」(『岩波講座　文学8』岩波書店、一九五四年六月)。
(17) 『へるめす』四六号、一九九三年一一月。
(18) メドヴェジェフ前掲書(一三三頁)、及び『ソ連における科学と政治』(熊井譲治訳、みすず書房、一九八〇年一二月、五二頁)。
(19) L・テプロフ著、宮川浹訳『機械は未来を予言する――サイバネティクス物語――』(ラテイス、一九六五年一〇月、三一八頁)。
(20) 東欧紀行前後の事情については拙稿「「国境」の思考――安部公房とナショナリティ――」(『文藝と批評』第八巻第五号、一九九七年五月)を参照されたい。
(21) 「日本共産党は世界の孤児だ――続・東ヨーロッパで考えたこと――」(『知性』一九五六年一〇月)。
(22) 注(21)に同じ。

新刊紹介

千葉俊二著
『エリスのえくぼ　森鷗外への試み』

(壁)成立直前のベルリンで出会った神経症気味のドイツ女子学生を描いた長谷川四郎の短編に、印象的なリフレインがある。「フロイライン・マイには、思いがけないものがある」。あばたもえくぼというが、思いがけなさとはいつも、滑稽なまでの対象への愛情なしには見えてこない。著者はこう語る。「私は自己を見失いかけたときいつも鷗外にかえり、鷗外作品を座標軸に自己の位置を確認する作業をしつづけてきたのだ」と。「ひとつの言葉の探索」に始まる表題作の「舞姫」論から、平易な語り口で堅実な論が展開される過程で、鷗外作品の思いがけない表情が浮かびあがる。

これは鬼面人を驚かすの逆であり、読み進めるうち読者は、待ち伏せる快い驚きを待ち受けるようになる。筆者のレッスンは、昨今横行する手軽に「分かる」ための「技法」教授とは異なる、「感じる」ための作一論―読者による共同作業である。思いがけない題が示す通り、チャーミングな鷗外への試み。あるいは鷗外論への不敵な挑発。

(平9・3　小沢書店　A5判　三〇二頁　二八〇〇円)　〔都築賢一〕

小森陽一・紅野謙介・高橋修編
『メディア・表象・イデオロギー　明治三十年代の文化研究』

本書は、十一人の「日本近代文学」研究者(明治三十年代研究会)による「明治三十年代の文化研究」(副題)の論文集である。三部からなり、「Ⅰ　ネットワーク・言説・メディア」では、スキャンダル・ジャーナリズムと法の支配、ツーリズム、東京の水道敷設、狂気をめぐる言説、「Ⅱ　家族・読者・文学」では、家庭小説、ベストセラー小説、少女小説、「Ⅲ　ことば・ハビトゥス・イデオロギー」では、国語政策、作文教育、女性雑誌、植民地主義の言説、といった問題が扱われている。例えば「文学」についていえば、今日でいう狭義の「文学」は、子ども・女性を排除し、方言や日本語以外の言語を排除し、さらに「通俗小説」など非芸術的な分子を排除するなかから囲い込まれてきた。本書はそれを、ただ「文学」の領域のみの問題とするのではなく、「メディア」や「国家」などを媒介にした受容の場の問題として重層的に扱い、近代的な価値観の生成過程を鮮やかに浮かび上がらせてくれる。執筆者は編者のほかに、藤森清、吉田司雄、柴市郎、金子明雄、関肇、久米依子、中山昭彦、金井景子の各氏。「研究会」としての問題意識を一貫して強く感じさせる一冊である。

(平成9・5　小沢書店　A5判　三三八頁　三一四三円)　〔永井聖剛〕

佐佐木幸綱著
『詩歌句ノート』

本書は「朝日新聞」夕刊に連載された「詩歌句ノート」と題するコラムを中心として、他の新聞・雑誌等に発表されたものを加えて一冊にまとめた、著者の最新エッセイ集である。

話題は日常の出来事から世間一般の時事にまで広く行き届いている。特に詩歌や言葉に関する論及は、現状を深く汲み取るところから書き起こされている。短歌詩型という表現形式のうちに身をおく著者の、鋭く開かれた視角が切り取った言葉の断層はリアルな手ざわりをもっており、言葉に自覚的であろうとする読者にとって、素通りできない問題に触れている。

「詩歌句ノートⅠ」「詩歌句ノートⅡ」「きょうの話題」「あすへの話題」、と大きく分かれているが、「詩・歌・句の境界に風穴をあける／ジャンルを超えて遊ぶスリル」という帯のコピーそのままに、どこから読み始めても楽しめる内容となっている。

(平9・5　朝日新聞社　A5判　三一八頁　二四〇〇円)　〔尾畑美穂子〕